

日常

ユーミン好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

永遠に終わらない『日常』の世界がここに！

目次

| | |
|-------------|---|
| ビスケット君3号 | 1 |
| カラスがかぞくになった | 5 |
| 第九カフエ×ゆっこ | 9 |
| パートII | |

ビスケット君3号

「できたあ〜！」

『東雲研究所』と書かれた家から声がした。

「な〜の〜！さ〜か〜も〜と〜！来て〜」

「はかせ、どうしたんですか？」

「ガキ、昼寝の途中で呼ぶな！」

東雲なのと猫の坂本がはかせの部屋へやってきた。

「ジャ〜ン♪『ビスケット君3号』です」

「ビスケット君3号です！」

はかせは、嬉しそうに紹介した。

「ああ、またですか」

なのは、興味無さそうに言った。

（『また』ってね…。まあ、僕はビスケット君2号をはかせが改造してできたからなあ…）

「ビスケット君3号は、1号と2号とは違うの〜！」

はかせは、猛アピールした。

「ビスケット君3号の特技は、野菜の早切りです!どうぞ!」

「了解です!台所をお借りします」

ビスケット君3号は、台所へ向かった。

はかせ、なの、坂本は、あとを追った。

タタタタタ…

「できました!」

「こんもりとキャベツのみじん切りができていた。

「…」

なの、は、黙り込んだ。

「反応、薄っ!てか、前と同じ展開・・・」

「なの、なんで、なんで、驚いてくれないの!」

「だって、早切りぐらいなら私にもできますから」

「でも、いつもゆっくりだよ!?!できるなら、なんでそのそやってんの!?!」

「だって、そうした方が人間らしいじゃないですか。あれ、前も同じこと言いませんでしたっけ?」

「確かに娘は言ってたぞ」

はかせは、少し泣きそうになりながら言った。

「じゃあ、なのはこれができるの!？」

ビスケット君3号は、氷柱とスイカを取り出して、それらを素早く削った。
数分後・・・

「わあー！すつすつすごいですね！ねえ、坂本さん」

坂本の耳がピクツと動いた。

「そ、そうだな」

二人が見たのは、氷でできたサメの像とスイカでできた睡蓮の花だった。

「ねえ、すごい?」

「はい、すごいです！パーティーの時にお願いしたいくらいです♪」

「えへへへ（へーへ）」

ビスケット君3号は、坂本に目をやった。

「疲れてるようですね。坂本さん、マッサージしてあげます」

ゆつくりと近づいていった。

「くつくるな！何されるかわからないからな！」

「えへへへ、大丈夫だよ」

そうしている間に坂本は、ビスケット君3号に掴まれた。

「じつとしててくださいね」

手を伸ばしていった。

「ぎゃーっ」

坂本は、思わず目をつむったが…

「気持ちいい」

坂本は、ニタッととした。

「ね、言つたでしよ」

はかせとなのは、どさくさに紛れて、肉球を触っていた。

「おい、ガキっ！娘っ！どさくさに紛れるな！」

東雲家は、今日も平和であった。

カラスがかぞくになつた

ある晴れた日、駅前スーパーで買い物して帰ると…

家前にカラスがいた。

「あ、カラスだ」

「はかせく、危ないですよ。ほら、裏口から入りましょう……つて、聞いてないし！」
はかせは、カラスに近づいた。

「なくのく、このカラス、あの時のカラスだよ」

「あ、本当ですね。なら、大丈夫ですね。じゃあ、家に入りましょう」

そういつて、カラスを掴み、家へ入った。

「また、しゃべらせてみようか」

「今度は、坂本さんのスカーフを使っちゃダメですよ。坂本さんを困らせたのは、はかせなんですから」

「はくい！ちゃんとつくってきまらさ」

はかせは、勢いよく走っていった。

「フグツ！なんだよ、ガキ！痛いじゃないかよ！人を踏むなよ！下見て歩けよ！」

はかせは、坂本に気づかず、走っていった。

「ガキ、聞け〜！」

「あ、坂本さん。大丈夫ですか。また、あのガラスが来ましたよ」

坂本は、なのとりビングに入った。

はかせが部屋に行ってから、10分後：

「できたあ〜！」

はかせは、右手に青いスカーフを持って戻ってきた。

「じゃあ、さっそくつけてみよう!!」

はかせは、カラスにスカーフをつけた。

「しゃべるかな？」

「喋るでしょ。はかせが違うものを作っていないなら…」

しばらくして、カラスが一言。

「どうもお久しぶりです。カラスです」

「わー、しゃべった！」

「なのさん、はかせさん、坂本さん、今日は、お願いがあつてきました」

カラスは、お辞儀をした。

「なんですか？お願いって」

「なのがカラスに聞いた。」

「実は、私、仲間のカラスに仲間はずれにされて…。寂しいので、一緒にここに住みたいんです」

「え…」

「え…」

「え…」

「「えーっ！」」

「ダメですか？」

「ダメだろ！なあ、娘…」

「いいよ、ね、なの♪」

「ええ、大丈夫ですよ」

「俺の話聞けー！」

「ありがとうございます。何かお役にたるといいのですが…」

「勝手に決めるな！」

「いいじゃないですか、坂本さん」

「さかもと、あたらしいかぞくがふえたね。えへへ…」

「ったく、しつかたねーな…。カラス、今日からここに住んでもいいぞ」

「なるの、カラスのなまえ、なにがいい？」

「そうですね、カイトとかどうですか？」

「カイト、いいですねえ」

「じゃあ、きょうからカイトだよ」

「ヨロシクな、カイト」

「こちらこそ、坂本さん」

カイトは、坂本の手にくちばしをつけた。

「いてっ！いてててて…」

「「アハハハハ…」」

東雲家は、今日も平和であった。

第九カフェ×ゆっこ パートII

この前、第九カフェに行ったとき、大失敗した。

だから、もう行くのをやめようかと思つてたけど、勉強し直して行つてみることにした。

「ご注文は……」

「えーと……、じゃあ、ココアの、シヨートで」

「ココアのスマールでよろしいでしょうか？」

（えええー！こ、この間は『シヨート』だったのにー！なんでー！）

足元がふらふらしてきた。

「それで……いいです」

「……ホットにしますか？アイスにしますか？」

「ホットで！」

「ホットになりますと、ハア……ハア……、ソロとスウィートがありますけれど……」

（『ドツピオ』なくなつてるー！てか、『スウィート』ってなに？『スウィートeat』？お酢を食べ

べるの〜？それじゃ、ココアじゃないよ〜）

ぐるぐる目が回っていた。

すると、『本日のおすすめ』の文字が目に入った。

活路を見いだしたようだった。

「あ…、ほ…本日のおすすめにしようと思つてたんだ…アハハ…ごめん、ごめん…忘れてた…」

すると、デジヤブを感じた。

「あのー、スウーハアー、スウーハアー、『本日のおすすめ』は、ホットココアになっておりますが…」

(ぎゃーっ、デジヤブ！)

「それでいいです！」

「ですから、ホットココアになりますと、…ソロとスウィートが…」

…ソロとスウィートが…

…ソロとスウィートが…

…ソロとスウィートが…

…ソロとスウィートが…

(もうどうしたらいいのー！)

もうヘトヘトだった。

「そ…そこらへん、取り繕ってください…」

「は、はい！」

(また、同じ失敗しちゃったよ…。トホホ…)

窓際の席に座り、ぼんやり外を眺めていた。

「お待たせいたしました〜、ホットココア・スモールです〜」

店員がカップを置いて、札を取っていった。

その店員は、あの時の男性と同じだった。

(デジャブ続きだなあ…)

デジャブとは違ったのは、カップの大きさが極小ではなかったことだった。

飲んでみた。

「甘っ！甘すぎる！」

あの時のコーヒー以上にショックが大きかった。

(涙が出るよう…)

なんとか激甘ココアを飲み干して、店を出た。

(みおちゃんに言ったら、笑われるかな…)

外に出ると、雨が降ってきた。

(第九カフェが…トラウマだよ…)

傘をささず、歩き始めた。

(これからは…ココアも…自動販売機でいいや…)

☆後日談☆

次の日、ゆっこは風邪で学校休みました。

ゆっこは、バカだなあ…

b y みお

ゆっこは、天才だよ。

…バカは、風邪引かないって言うでしょ…？

b y まい

相生^{あいおい}さん、甘いものを取りすぎると、体に悪いですよ。

b y なの

はかせもココアのみたい！

b y はかせ

ばつかなやつだなあ…。

b
y坂
本